

3L-7

物語文章中の会話文に関する考察

桃内 佳雄 (北大工学部)

1. まえがき: 会話文は、物語文章中で、その物語に登場する物が話したり思ったりすることを表現するためにしばしば用いられ、物語文章理解システムの構築にとってその解析はきわめて重要である。本報告では、小学校一、二年生の国語教科書中の物語文章に現れる会話文の調査に基づいて、会話文に関する一つの基礎的な考察を行う。会話文とそれに隣接する地の文章との間の関連の構文的・意味的パターンを考察したうえで、会話文を文章の意味構造を構成する単位へとまとめてゆくための基本的な手続きについて検討する。

2. 会話文に対する枠組み: 会話文は、「」で括られ、地の文章に埋め込まれた形で文章中に現れる。本考察では、会話文解析の第一ステップは、会話文を一つの連用修飾語句とする次のような形の基本的な枠組みを構成することと考える。[<会話主体>が<会話相手>に「…」と<述語>]。このような枠組みを会話文枠組みと呼ぶことにする。<述語>の分類とそれに対応する会話文枠組みは次のようである。

- (1) "言う"類: いう、たのむ、たずねる、... [<会話主体>が<会話相手>に「」と言う]
 (2) "思う"類: おもう、うたう、... [<会話主体>が「」と思う]
 (3) "書く"類: かく、... [<会話主体>が<会話相手>に「」と書く]

(1)は登場物間の話し言葉による対話、(2)は登場物の独話、(3)は登場物間の書き言葉による対話において用いられ、最も多く現れるのは(1)類である。このような、会話文を連用修飾語句としてとりうる述語を含む文を会話述語文と呼ぶことにする。実際の文章では、会話文と隣接する地の文章中に<主体>と<相手>と<述語>に対応するすべての表現が現れるわけではなく、文脈に依存した様々なパターンが存在し、会話文枠組みの構成において、もし、それらの表現が省略されている場合には、復元処理を行わなければならない。

3. 会話文と地の文章との関係: 会話文と地の文章との構文的関係を分類すると次のようになる。

[I] 会話文を「…」と」という形の連用修飾語句として埋め込める文が地の文章の中に存在する場合

- (1) "と" 引用 : 「…」と言いました。
 (2) 指示詞による引用: 「…」 そう言いながら、... : 前方指示参照
 (3) "零" 引用 (3. 1) ... と言いました。「…」 : 後方零参照
 (3. 2) 「…」 ... と言いました。 : 前方零参照
 (3. 3) 「…」 ... と言いました。「…」 : 前後方零参照

[II] 会話文を埋め込める文が地の文章の中に存在しない場合

- (4) 独立引用 : ... 「…」 ... (前あるいは後の文が会話述語文である場合もある)

また、その会話文が登場物の考えや思いを表出したものであるか、そうでないかによる分類も考えられる。そうでない場合としては、たとえば、登場物の行為に付随して表出されるかけ声(「よっこらしょ」、「うんとこしょ、どっこいしょ」)などがある。その場合、文脈中にその行為が存在する場合とそうでない場合がある。

4. 会話文の結合: 前章の(3. 3)の類型において、前後の会話文の間どのような関係があるかについて考察する。これは、本来、ひとつの会話文にまとめることのできるものを二つに分割したとも考えることができる。どのような分割が存在するか、逆に言うと、二つの会話文の間どのような関係が存在したら、一つにまとめて、それらの間の会話述語文である地の文に連用修飾語句として埋め込み、会話文枠組みを構成することができるだろうか。まず、具体例を示そう。会話述語文をはさんで、前の文を前文、後の文を後文と呼ぶことにする。

- a. 「かたつむりくん。」 b. かえるくんがいました。 c. 「おねがいでけど、
このてがみをがまくんのいえへもって行って、ゆうびんうけに入れてきてくれないかい。」
d. 「まかせてくれよ。」 e. かたつむりくんがいました。 f. 「すぐやるぜ。」

aとcを結合してbに、dとfを結合してeに埋め込むことができる。たとえば、[d、e、f]については、その枠組みを次のように構成することができる。[かたつむりくんが、かえるくんに、「まかせてくれよ。すぐやるぜ。」と、いました]。これらの例において、前文と後文の間には、どのような関係があるだろうか。

- [a、b、c]：前文(a)：呼びかけ、後文(c)：具体的内容；依頼
[d、e、f]：前文(d)：直接的応答、後文(f)：付加情報；意志

対話者をP1、P2とし、そのそれぞれの会話をC1、C2とすると、この例では、C1、C2ともに会話述語文をはさんでそれぞれ二つに分割されて表現されていることになる。

{<P1>}：C1 [C11--r1--C12] --R12-- C2 [C21--r2--C22]：{<P2>}

接続関係r1、r2に加えて、C1とC2の間の接続関係R12についての考慮も重要で、上の例では依頼・応答という関係がこれにあたる。これと似たパターンとして、次のようなものがある。

- ”提案” [呼びかけ-r1-具体的内容；提案] -R12- ”応答” [直接的応答-r2-付加情報；理由]
”説得” [呼びかけ-r1-具体的内容；説得] -R12- ”応答” [直接的応答-r2-付加情報；理由、説明]

この他に、C2に特に注目して、下表のような関係が実際の資料の調査・検討により抽出された。

会話述語文をはさんで、二つの会話文が、ここで抽出したような接続関係にある場合には、一つに結合してその会話述語文に埋め込むことによって枠組みを構成する。

C 1	：	C 2 1	—	C 2 2
相手の状態の確認	：	直接的応答	—	付加情報・理由
質問	：	直接的応答	—	付加情報・感想／説明
ある事に関する信念	：	同じ事に関する異なる信念	—	理由
事実	：	反復・確認	—	事実の内容について
事柄	：	感嘆詞	—	感嘆の内容

5. 会話文枠組みを構成するための基本的手続きの概要： 手続きの概要を下に示す。

会話述語文、前方指示参照文、あるいは、後方指示参照文であるかどうかは、文法的手がかりによって、比較的容易に判定可能であろう。問題は、*1、*2、*3 における、前文あるいは後文への埋め込み可能性の判定である。*1 については、4. での考察が直接的に有用な情報を与えるであろう。*2 と *3 についても、現在、処理中の会話文の内容が4. でのC 2 1に対応するようなものであるかどうかの検査、あるいは後後文への処理の拡大が重要な手がかりを与えるであろう。

- < 1 > 会話文が”と”引用ならば、その”と”引用文へ埋め込まれる。
- < 2 > 前文が会話後方指示参照文ならば、前文へ埋め込む。
- < 3 > 後文が会話前方指示参照文ならば、後文へ埋め込む。
- < 4 > 前文が会話述語文であり、
前前文が会話文でなければ、前文へ埋め込む。
- < 5 > 前前文が会話文であり、
前文へ埋め込めれば[*1]、前文へ結合処理により埋め込む。
- < 6 > 前文へ埋め込めず、
後文が会話述語文であり、
後文へ埋め込めれば[*2]、後文へ埋め込む。
- < 7 > 後文へ埋め込めなければ、独立引用。
- < 8 > 後文が会話述語文でなければ、独立引用。
- < 9 > 前文が会話述語文でなく、
後文が会話述語文であり、
後文へ埋め込めれば[*3]、後文へ埋め込む。
- < 10 > 後文へ埋め込めなければ、独立引用。
- < 11 > 後文が会話述語文でなければ、独立引用。

6. あとがき： 本報告でその基礎を考察した会話文解析は、個々の会話文の解析が可能であることを仮定しているが、会話文そのものの解析についても、まだ多くの問題が残されており、それらの考察が必要である。

7. 参考文献：1)三上章：日本語の構文、くろしお出版、1963。 2)永野賢：文章論総説、朝倉書店、1986。